脊柱側彎症検診

■検診を指導・協力した先生

南昌平

聖隷佐倉市民病院名誉院長

(協力)

北里大学医学部整形外科 慶應義塾大学医学部整形外科 東京都済生会中央病院整形外科 順天堂大学医学部整形外科 千葉大学医学部整形外科 東京慈恵会医科大学整形外科

●検診の方法およびシステム

検診は、都内14区9市1町の公立の小・中学校および一部の私立学校の児童生徒を対象に、地区により対象学年が異なるが、下図に示した方式により実施している。なお、地区ごとの対象学年は次のとおりとなっている。

- ◎小学5年生と中学2年生·····千代田区,文京区,台東区,江東区,足立区,調布市,小平市,国分寺市
- ◎小学5年生と中学1年生·····新宿区,中野区,豊島区,北区,荒川区,葛飾区,江戸川区,西東京市,狛江市,多摩市,日野市,瑞穂町

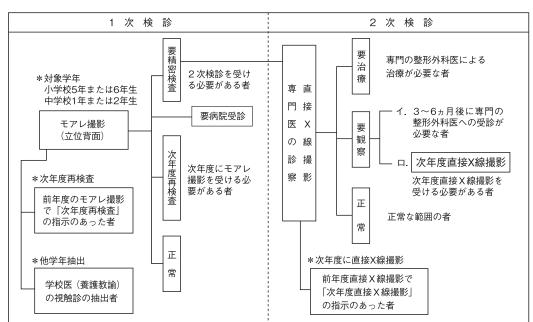
- ◎小学6年生と中学2年生……渋谷区
- ◎小学5年生のみ……あきる野市
- ◎中学1年生のみ……板橋区、東村山市

なお、豊島区と板橋区、江戸川区では1次検診のモアレ撮影のみを東京都予防医学協会(以下,本会)で実施したが、2次検診以降は他機関で実施しているため、検診成績には含まれない。

さらに、東村山市の小学校、あきる野市の中学校、稲城市、檜原村においては、モアレ撮影の対象者を視触診で抽出(校医または養護教諭が実施)していることから、検診方式が異なるため、やはり成績から除外している。

●小児脊柱側彎症相談室

本会保健会館クリニック内に、「小児脊柱側 彎症相談室」を開設して、治療についての相談 や経過観察者の事後管理などを予約制で実施 している。診療は大塚嘉則千葉東病院名誉院 長が担当している。



脊柱側彎症検診のシステム

脊柱側彎症検診の実施成績

南 昌 平 聖隷佐倉市民病院名誉院長

はじめに

東京都予防医学協会による都内小中学生を対象とした脊柱側彎症学校検診は,1979(昭和54)年4月の改正学校保健法施行規則の施行に先立つ1978年度に受診者2,256人から始まった。以来本検診は継続・発展し,2011(平成23)年度で34年目を迎えた。

この間に検診の方式は当初のモアレ、低線量X線撮影、通常X線撮影の3段階方式から、1999年以降のモアレ、専門医診察による通常X線撮影の2段階方式に変更され、より効率的な検診方式として定着している。

2011年度の脊柱側彎症検診実施地区と地区ご との対象学年は前ページに記載のとおりである。 本稿ではこの検診の実施成績を分析した。

2011年度脊柱側彎症検診の実施成績

2011年度の脊柱側彎症検診の総実施件数は,1 次検診としてのモアレ撮影で小学生32,172人,中学生で28,000人,計60,172人である。この中から2次検診として専門医の診察を経て直接X線撮影を受けたものは小学生139人,中学生395人,計534人であった(表1)。

X線撮影の結果,新たに発見された15度以上の側彎は,小学生男子16,473人中5人(0.03%),女子15,699人中78人(0.50%),計32,172人中83人(0.26%)であった。中学生では男子13,352人中14人(0.10%),女子14,648人中224人(1.53%),計28,000人中238人(0.85%)であった。20度以

上の側彎に限ると、小学生は男子2人(0.01%)、女子46人(0.29%)、計48人(0.15%)で、中学生は男子6人(0.04%)、女子143人(0.98%)、計149人(0.53%)であった(表2)。

モアレ撮影異常者の割合は、小学生男子で1.78%、 小学生女子で7.09%、中学生男子で5.29%、中学生 女子で14.63%であった。モアレ異常者の内訳は、小 学生男子異常者293人中、要2次検査者13人(0.08%)、 要病院受診者4人(0.02%)、次年度モアレ再検者276 人(1.68%)である。同様に小学生女子異常者1,113人

表1 脊柱側彎症検診実施数

		(2011年度)
区分	モアレ撮影	直接X線 撮 影
小 学 校	32,172	139
中 学 校	28,000	395
計	60,172	534

(注) 1次モアレ, 2次直接X線の検診方式による実施数

表2 Cobb 法による側彎度分類

								(2011	年度)
Σ	区分		モアレ 受診者	15~19度 の側彎	%	20度以上 の側彎	%	15度以上 の側彎計	%
		男	16,473	3	0.02	2	0.01	5	0.03
/]\	小学校	女	15,699	32	0.20	46	0.29	78	0.50
		計	32,172	35	0.11	48	0.15	83	0.26
	中学校	男	13,352	8	0.06	6	0.04	14	0.10
中		女	14,648	81	0.55	143	0.98	224	1.53
		計	28,000	89	0.32	149	0.53	238	0.85
		男	29,825	11	0.04	8	0.03	19	0.06
合	計	女	30,347	113	0.37	189	0.62	302	1.00
		計	60,172	124	0.21	197	0.33	321	0.53

⁽注) ① %は,モアレ撮影受診者に対する割合

② 成績は,1次モアレ撮影,2次直接X線撮影の方式による

																	(20	11 牛/皮/	
		1次・モアレ撮影								2次・直接X線撮影									
区分	分									Cobb 角度別内訳									
		受診者数	(異常者数	異常者数	異常者数	(%)	要2次 検査	(%)	要病院 受診	(%)	次年度 モアレ	(%)	10度	(%)	10度 ~14度	(%)	15度 ~19度	(%)	20度 以上
	男	16,473	293	(1.78)	13	(0.08)	4	(0.02)	276	(1.68)	3	(0.02)	3	(0.02)	3	(0.02)	2	(0.01)	
小学校	女	15,699	1,113	(7.09)	141	(0.90)	8	(0.05)	964	(6.14)	21	(0.13)	29	(0.18)	32	(0.20)	46	(0.29)	
	計	32,172	1,406	(4.37)	154	(0.48)	12	(0.04)	1,240	(3.85)	24	(0.07)	32	(0.10)	35	(0.11)	48	(0.15)	
	男	13,352	706	(5.29)	56	(0.42)	3	(0.02)	647	(4.85)	7	(0.05)	19	(0.14)	8	(0.06)	6	(0.04)	
中学校	女	14,648	2,143	(14.63)	457	(3.12)	64	(0.44)	1,622	(11.07)	49	(0.33)	82	(0.56)	81	(0.55)	143	(0.98)	
	計	28,000	2,849	(10.18)	513	(1.83)	67	(0.24)	2,269	(8.10)	56	(0.20)	101	(0.36)	89	(0.32)	149	(0.53)	
	男	29,825	999	(3.35)	69	(0.23)	7	(0.02)	923	(3.09)	10	(0.03)	22	(0.07)	11	(0.04)	8	(0.03)	
合 計	女	30,347	3,256	(10.73)	598	(1.97)	72	(0.24)	2,586	(8.52)	70	(0.23)	111	(0.37)	113	(0.37)	189	(0.62)	
	計	60,172	4,255	(7.07)	667	(1.11)	79	(0.13)	3,509	(5.83)	80	(0.13)	133	(0.22)	124	(0.21)	197	(0.33)	

の内訳は、要2次検査者141人(0.90%)、要病院受診 者8人(0.05%), 次年度モアレ再検者964人(6.14%) である。中学生男子異常者706人の内訳は、要2次 検査者56人(0.42%), 要病院受診者3人(0.02%), 次 年度モアレ再検者647人(4.85%)で、中学生女子異 常者2,143人では、要2次検査者457人(3.12%)、要 病院受診者64人(0.44%), 次年度モアレ再検者1,622 人(11.07%)であった。モアレ異常者に対する2次 検診としての直接X線撮影の結果を側彎度別にみ ると,小学生男子では20度以上2人(0.01%),15~ 19度3人(0.02%), 10~14度3人(0.02%), 10度未 満3人(0.02%)である。小学生女子は20度以上46人 (0.29 %), 15~19度32人(0.20 %), 10~14度29人 (0.18%), 10度未満21人(0.13%)である。中学生男 子では20度以上6人(0.04%), 15~19度8人(0.06%), 10~14度19人(0.14%), 10度未満7人(0.05%)であ る。中学生女子では20度以上143人(0.98%), 15~ 19度81人(0.55%), 10~14度82人(0.56%), 10度 未満49人(0.33%)であった。これらをまとめると、 60.172人の中から20度以上の側彎は197人(0.33%)が 発見されたが、他方では10度未満の擬陽性者が80人 (0.13%) あったことになる(表3)。

2次直接 X 線撮影による管理区分判定結果の内訳 は次のとおりである。要治療者は小学生男子2人 (0.01%),小学生女子23人(0.15%),中学生男子1人

表4 モアレ異常者に対する2次直接撮影結果

						(201	1 年度)
区分		要治療	(%)	要観察 3~6ヵ月後	(%)	次年度直接 X線撮影	(%)
小兴林	男	2	(0.01)	4	(0.02)	2	(0.01)
小 学 校	女	23	(0.15)	52	(0.33)	29	(0.18)
中学校	男	1	(0.01)	16	(0.12)	17	(0.13)
	女	56	(0.38)	174	(1.19)	106	(0.72)

(注)%は、モアレ受診者に対する割合

(0.01%), 中学生女子56人(0.38%)である。3~6ヵ月後の経過観察者は小学生男子4人(0.02%), 小学生女子52人(0.33%), 中学生男子16人(0.12%), 中学生女子174人(1.19%)である。次年度直接X線撮影とされたものは小学生男子2人(0.01%), 小学生女子29人(0.18%), 中学生男子17人(0.13%), 中学生女子106人(0.72%)であった(表4)。

年度別の検診数について1978年度を1として比較すると、2011年度のモアレ撮影数は26.7であった(表5)。

1978年度以降の15度以上の側彎の年度別発見率を表6に示した。ここにみられる傾向としては、検診開始当初の高い発見率は年毎に漸減し、1986年度頃より横ばい状態になっていたが、1998年度より再び高めに推移していた。しかし、2007年度から小学校は0.2%、中学校は0.8%前後を推移している(表6)。

特発性側彎症における遺伝的要因に関する知見

脊柱側彎症の中で, 最も多くを占める特発性側 彎症の原因は不明とされ, 現在まで原因究明に関す る研究により、骨・軟骨構造異常説、傍脊柱筋異常 説、神経系異常説、カルモジュリン・メラトニン関 与など多くの仮説が提唱され、さらに遺伝的要因の 関与が指摘されてきたが、いまだ特定されるに至っ ていない。遺伝性疾患の多くは単一遺伝子変異によ り受け継がれるもので、側彎症の中でも、Marfan症 候群や神経線維腫症(レックリングハウゼン病)など は、疾患遺伝子が明らかとなっているが、思春期特 発性側彎症は以前から遺伝性が指摘されているもの の、未知の疾患であり、原因遺伝子の探索が広く行 われている(図1)。概してこれら疾患の遺伝様式は常 染色体優性遺伝、常染色体劣性遺伝、性染色体伴性 遺伝に分けられるが、単一の遺伝子によらないメン デルの遺伝様式を取らない多因子遺伝による多くの 疾患がある(表7)。側彎症における遺伝的要因に関す る研究では大家系調査を通じて広く行われ、近年全 ゲノム関連解析が明らかになり、遺伝子研究がおお いに発展し, 多因子遺伝である可能性, 側彎進行の 予測など思春期特発性側彎症の病像が明らかになり つつある。

思春期特発性側彎症における遺伝子検索の歴史では、双生児例に対する検討から、一方が側彎症の場合、一卵性双生児は76%、二卵性は36%の確率で発症するとの報告があり、筆者らも側彎症のtwin studyを行い、一卵性は92%、二卵性は63%と、一卵性で極めて高い浸透率で、かつ二卵性が低くなっていることから、遺伝的要因が強い疾患であることが明らかであるとされている5。1970年、Harringtonは側彎にて加療している患者に対し、母親のX線を撮影し得た407組を検索した結果、母親が15度以上の側彎を有した例は113人で、娘が側彎となる確率は27%とし、家族性に発症することを指摘した3。また家系調査による遺伝様式の研究では、1973年 Riseborough、Wynne-Davis らが特発性側彎症の大家系の調査から第1世代が11%、第2世代は24%、第3世代は14%

表5 背柱側彎検診 年度別検診数

		(1978~2011年度)
年度	モアレ撮影件数	低線量X線撮影件数
1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010	2,256 (1.0) 17,416 (7.7) 44,986 (19.9) 68,157 (30.2) 73,296 (32.5) 74,879 (33.2) 80,982 (35.9) 81,466 (36.1) 77,810 (34.5) 81,838 (36.3) 81,306 (36.0) 72,308 (32.1) 73,859 (32.7) 76,657 (34.0) 72,919 (32.3) 70,542 (31.3) 67,392 (29.9) 65,272 (28.9) 66,110 (29.3) 61,570 (27.3) 58,611 (26.0) 55,924 (24.8) 54,130 (24.0) 54,244 (24.0) 54,244 (24.0) 54,746 (24.3) 53,870 (23.9) 52,079 (23.1) 51,443 (22.8) 50,118 (22.2) 54,544 (24.2) 58,956 (26.1) 59,384 (26.3) 59,939 (26.6)	311 (1.0) 2,620 (8.4) 8,172 (26.3) 12,584 (40.5) 13,758 (44.2) 11,037 (35.5) 12,140 (39.0) 12,628 (40.6) 9,816 (31.6) 8,331 (26.8) 9,242 (29.7) 7,699 (24.8) 7,301 (23.5) 7,127 (22.9) 6,527 (21.0) 6,283 (20.2) 5,397 (17.4) 4,498 (14.5) 4,300 (13.8) 4,413 (14.2) 5,266 (16.9)
2009	59,384 (26.3)	

表6 背柱側彎検診 年度別側彎発見率

				(1978~20	11年度)				
年度	小	学 校		中	中 学 校					
+ 反	受診者数	15度以上	(%)	受診者数	15度以上	(%)				
1978	1,473	8	(0.54)	783	13	(1.66)				
1979	8,368	36	(0.43)	7,921	109	(1.38)				
1980	14,970	73	(0.49)	18,339	268	(1.46)				
1981	18,495	70	(0.38)	21,441	354	(1.65)				
1982	25,244	66	(0.26)	25,827	301	(1.17)				
1983	27,151	87	(0.32)	25,815	240	(0.93)				
1984	30,677	98	(0.32)	29,101	248	(0.85)				
1985	29,125	63	(0.22)	32,579	177	(0.54)				
1986	26,630	44	(0.17)	32,469	201	(0.62)				
1987	25,559	45	(0.18)	32,705	136	(0.42)				
1988	25,601	42	(0.16)	32,354	151	(0.47)				
1989	24,325	40	(0.16)	27,050	129	(0.48)				
1990	26,297	56	(0.21)	28,299	147	(0.52)				
1991	25,549	50	(0.20)	29,388	192	(0.65)				
1992	30,788	57	(0.19)	33,400	164	(0.49)				
1993	30,882	54	(0.17)	31,511	197	(0.63)				
1994	31,486	55	(0.17)	30,994	152	(0.49)				
1995	30,367	45	(0.15)	29,971	124	(0.41)				
1996	29,077	43	(0.15)	32,465	168	(0.52)				
1997	27,953	47	(0.17)	29,277	165	(0.56)				
1998	27,234	58	(0.21)	27,280	218	(0.80)				
1999	28,908	53	(0.18)	27,016	192	(0.71)				
2000	27,181	74	(0.27)	26,949	245	(0.91)				
2001	27,746	62	(0.22)	26,498	262	(0.99)				
2002	28,069	56	(0.20)	26,677	172	(0.64)				
2003	27,763	67	(0.24)	26,107	218	(0.84)				
2004	27,671	87	(0.31)	24,408	249	(1.02)				
2005	27,904	76	(0.27)	23,539	250	(1.06)				
2006	26,634	72	(0.27)	23,484	240	(1.02)				
2007	28,415	64	(0.23)	26,129	227	(0.87)				
2008	31,256	72	(0.23)	27,700	230	(0.83)				
2009	31,916	74	(0.23)	27,468	218	(0.79)				
2010	31,945	69	(0.22)	27,994	238	(0.85)				
2011	32,172	83	(0.26)	28,000	238	(0.85)				

が罹患するとし 8 , また1972年 Cowellは17家系192人のX線, 身体 所見から男性から男性へ受け継いだ 例を報告し、X染色体連鎖遺伝の可 能性を示唆した 2 (図2-1, 図2-2)。

1992年Carrらは疾患遺伝子単離に向けて、細胞外マトリックス遺伝子であるコラーゲンに焦点を当てたpositional cloningという手法による研究を試み¹⁾、また1997年井上は側彎症の家族歴を有する大家系を対象に、過去に異常が報告されているI型コラーゲン、II型コラーゲン、フィブリリンに着目してマイクロサテラ

イトマーカーを用いたcandidate gene approachによ り linkage解析を行ったが、連鎖せず、単一遺伝子に よる疾患の可能性は低く、多因子遺伝の可能性を示 唆した4)。したがって、近年これらの遺伝子の単離を 目指した戦略は無効とされ、多数の遺伝子の関与や 環境因子の関与もある多因子遺伝疾患と位置づけら れる傾向が強くなった。すなわち多くは罹患しやす さ、あるいは疾患の進行性などを規定する要因など を検索する疾患感受性遺伝子に焦点を当てる研究に 変化し、これらを探索する研究が行われるようになっ ている。多因子遺伝疾患に対しては非血縁患者群と 健常者群(対照群)の変異遺伝子の数の差から疾患感 受性遺伝子をつきとめていく、 関連解析 association studyが行われ, 近年遺伝子のカタログ化, 遺伝子 の位置情報データベースが明らかとなり、genomewide 連鎖解析, 全ゲノム関連解析 genome-wide association study (GWAS) が行われるようになっ た。さらに遺伝子多型のうち、一つの塩基が他の塩 基に置換され、染色体上の同じ位置の一塩基が個人 によって異なっている一塩基多型 single nucleotide polymorphism (SNP) を利用して、その頻度から関連 解析 association study を行うことにより、疾患感受性 遺伝子の特定が可能となっている(図3)。

図1 Marfan症候群に伴う側弯症の家族例



y 新前 術後

図 2-1. 常染色体遺伝

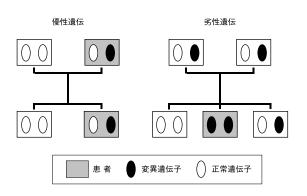
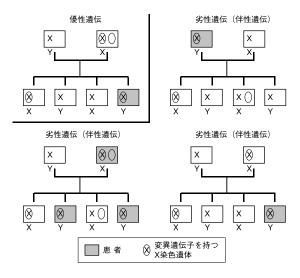


図2-2 X染色体遺伝



genome-wide 連鎖解析, GWASによる研究では, 唯一高橋らが日本人思春期特発性側彎症1050人と1474人の対照群の検討において, SNP rs11190870に高い頻度差があり, LBX1遺伝子が感受性遺伝子として, 10q24.32に位置することを指摘した⁷⁾。

米国においては上記の思春期特発性側彎症のサン プルからGWASにより159の側彎進行に有意に関連 するSNPが特定され、さらにより密接に側彎進行を 予測できる53のSNPが特定され、患者の唾液からの 検索により、進行度リスクのスコアが計算されるよ うになっている。現在商業ベースでScoliScoreとして 患者唾液からlow risk score 1-50, intermediate risk score 50-180, high risk score 180-200に分けられる。 low risk は75%以上の患者で25度以下に収まるとの 予測から、治療の必要性がないとされ、intermediate risk は最終的に25~39度に収まり、手術になる可 能性が20%以下と予測されるグループである。high risk は手術の可能性が高く、装具の成功率が1%以下 としている6。しかしこれらの検索は人種により異な り、日本人には全く該当せず、日本人における検索 が必要となっており、現在上記高橋らの研究が進行 中であり、待たれるところである。

思春期特発性側彎症の遺伝学的研究においては、メンデルの法則に従わない疾患は単一の遺伝子のみでなく、いくつかの遺伝子あるいは環境因子の関与により発症、疾患の進行に関わっていることが示唆され、多因子遺伝疾患を想定した遺伝子多型を用いた関連解析association studyが必要であり、近年この分野は急速に進歩を遂げており、今後さらに明らかにされるものと思われる。

対対

- Carr AJ, Ogilvie DJ, Wordsworth BP, et al: Segregation of structural collagen genes in adolescent idiopathic scoliosis. Clin Orthop 274: 305-, 1992.
- Cowell HR, Hall JN, macEwen GD: Genetic aspects of idiopathic scoliosis. Clin Orthop Res 86: 121-131, 1972.

図3 遺伝的素因と環境因子

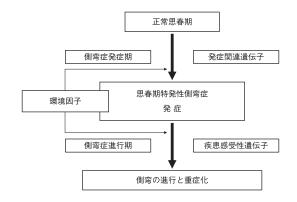


表7 疾患遺伝様式の割合



浸透率:変異遺伝子を受け継いでいる場合の症状を呈する 割合 (年齢に依存する場合がある) 特発性側弯症は多因子遺伝の関与が強く示唆されている

- Harrington PR: The etiology of idiopathic scoliosis.
 Clin Orthop Res 126: 17-25, 1977.
- 4) 井上雅俊,南 昌平,北原 宏ほか:特発性側弯症 のリンケージ解析―原因遺伝子単離へのアプロー チ 脊柱変形12:20-24.1997.
- Inoue M, Minami S, Kitahara H, et al: Idiopathic scoliosis in twins studiesd by DNA fingerprintingthe incidence and type of scoliosis. J Bone and Joint Surg 87-A: 212-217, 1998.
- 6) Ogilivie JW, Braun J, Agyle V, et al: The search for idiopathic scoliosis gene. Spine 31: 679-681, 2006.
- 7) Takahashi Y, Kou I, Takahashi A, et al: A genomewide association study identifies common variants near LBX1 associated with adolescent idiopathic scoliosis. Nat Genet 43: 1237-1240, 2011.
- Wynne-Davis R: Familiar (idiopathic) scoliosis: A familiar survey. J Bone Joint Surg 50-B: 24-30, 1968.